



【絶望の中でも弛まない神の救いの御業】

聖書本文:ルツ記1章15-18節/暗唱聖句:箴言8:17

説教者:鄭南哲牧師
(Rev. Jung nam-chul)

愛する信仰の家族のみなさん!一週間も主の平安で守られましたか?

今日我々を招く旧約聖書8番目のルツ記は4章だけの短い聖書ですが、まるで文学小説のような美しい内容が記されています。お嫁であるルツの姑への愛と親孝行(おやこうこう)はベツレヘムの野原の美しい花のように感動を与えて下さいます。そのためみなさんもよくご存知の17世紀有名な画家(がが)だったオランダのレンブラント・ファン・レイン (van Rijn Rembrandt 1606-1669)はルツ記を背景に‘落ち穂を拾うルツ’という有名な絵画を残し、フランスの有名な画家だったミレー(Jean Francois Millet,1814-1875)が残した‘落ち穂拾い’(1857)も実はこのルツ記を背景にした作品です。

ルツ記では野原で落ち穂を拾っているルツの姿を表し、ルツの姿から表されるすばらしい親孝行、夫を失った一人の女の痛みと悲しみ、ボアズに出会って新しい家庭を築く男女の愛を語ることがこのルツ記の目的ではありません。それよりもっと大切なメッセージがありますが、それが今日の説教の目的です。今日の課題はルツ記はどんな御言葉であって、我々に与えようとするメッセージは何であることを確認することです。

<1. ルツ記とは >

イスラエルのユダヤ人たちは五旬節になるとかならずこのルツ記を通読したそうです。五旬節とは本来シナイ山で律法を頂いた日を記念する祭りとして初の実をささげる時、守っていましたが(出23:16)、この時イスラエルの民が公に通読したのです。ルツ記は詩篇、箴言、伝道者の書、雅歌書とともに詩歌(しいか)書として分類されています。旧約聖書の順番を見ると、旧約の士師記の次になっていますが、その理由はルツ記の内容が士師時代にあった出来事だからです。

<2. ルツ記の内容 >

まず、この聖書の内容をまとめてみましょう。ユダヤのベツレヘムにエリメクという人が住んでいました。ベツレヘムにはげしいききんがあり、彼の妻ナオミと二人の息子マフロンとキルヨンを連れて異邦の地であったモアブに移住していきました。ところが、モアブに行ってもないうちに夫であるエリメクが死んでしまいます。夫を失ったナオミは二人の息子をモアブの女たちと結婚をさせました。なぜ息子たちの名前をそのようにつけたのか分かりませんがナオミの長男マフロン(青白い:病色)と次男キルヨン(意味一軟弱)も名前のおりに体は健康ではありませんでした。結婚してしばらくしてから二人の息子も死んでしまったのです。

他国で夫を失い、二人の息子まで失い、家系を受け継がせる人がない絶望的な状態でナオミはふたたびイスラエルのユダヤに戻る決心をします。神様がご自分の民に食糧が与えられたという知らせを聞いたからです。約10年間モアブに住んでいたナオミが里帰りを決心した時、夫もいない二人のおよめさんに自分たちの実家に戻るようにと勧めます。長男の妻だったオルパは姑と別れて自分の実家に戻りました。しかし、ルツは人間的にはなんの望みはありませんでしたが、最後まで姑であるナオミを離れないで、一緒にユダヤの地に戻ってきます。ルツは自分の民と自分の神を捨てて(ルツ1:15)、神様の民になろうとしたのです。

ルツ記 1章16節を読んでみましょう。

“ルツは言った。「あなたを捨て、あなたから別れて帰るように、私にしむけないでください。あなたの行かれる所へ私も行き、あなたの住まれる所に私も住みます。あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です。あなたの死なれる所で私は死に、そこに葬られたいのです。もし死によっても私があなたから離れるようなことがあったら、主が幾重にも私を罰して下さいように。”
ルツは断然として自分の決心を変えませんでした。ルツは“姑の神が私の神になる”という望みをもって最後まで姑と一緒にベツレヘムに戻ります。

約10年ぶりに会う町の人々はナオミをみて、“あらま、ナオミではないか”と歓迎してくれましたが、ナオミはこれからは私を‘ナオミ(私の喜び)’と呼ばないで、‘マラ(苦しみ)’と呼んでくださいと言います。もっと住みやすいところに行って住むと言う希望をもってモアブに行ったのだが、すべてを失って、手ぶらでかえってきたナオミはもう喜ぶことができずでした。帰国したナオミとルツはその日食べる糧さえもなく穂をつんで行く生活になります。貧しい人たちのために神様が畑の穂を残して置くようにと命じられたので(申命記24:19)落ち穂を拾って生活ができたのです。たまたまルツはボアズの畑で落ち穂を拾うようになり、ボアズは自分の畑で続けて拾うようにと配慮してあげます(2:14-16)。

実際ボアズはナオミの親戚として‘買い戻しの権利のある親類の一人’(ルツ2:20)でした。このような出会いをとおしてルツはボアズに‘買い戻しの権利のある人’になってくれるようにと頼みますが、これはつまり結婚の申し出のようなことです(ルツ3:9)。

ボアズはルツの申し出を受け入れ、ルツと結婚するようになります。ボアズとルツから子が生まれますが、その子がオベデです。オベデはエッサイを生み、エッサイはダビデを生み、預言のとおり、ダビデの子孫からイエス・キリストが生まれるのです。そ

ういわけでルツはダビデの曾祖母になったということでこのルツ記は終わります。ルツ記ではルツが姑であるナオミに表した道徳的教訓もあります。しかし、このルツ記はこれよりもっと大切な教えがありますが、苦難の中でも変わりのない神様の救いの御業を教えていると言うことです。

<3. ルツ記で注目する点>

<一つ目、ルツはイスラエル人ではなく、異邦の女である>

ルツ記で我々が注目したい点が2つあります。一番目はルツはイスラエル人ではなく異邦の女だったということです。ルツは人間的に言えば、不幸な女でした。彼女は結婚してまもないうちに夫を失い、この世での望みがない状態です。しかし、彼女は姑と一緒にユダヤの地に来て、落ち穂を拾いながらの生活になります。

この異邦の女であったルツは苦難を乗り越えて神様の民になります。彼女は自分の実家に帰りなさいというナオミのお願いにもかかわらず神様を信じ、求めたわけです。1章15節に兄嫁であるオルパは“自分の民と、自分の神に帰って行った”と書かれています。当時モアブの人々はモアブの神々に拝んでいましたが、ルツはモアブの神を捨てて神様について行きました。(2:13)ルツがしたことはこれだけです。ルツはこの世的には望みは見えませんが、姑ナオミのようにただ神様を追い求めたのです。そういうわけで、ルツは異邦の女でしたが、結局神様の民として生きようになったのです。

聖書は66冊ですが、この66冊の中女性の名前でつけられた聖書は何冊あるでしょうか？ たった2冊だけです。一冊はユダヤ人の女についてのエステル記です。異邦の王と結婚したユダヤ人のエステルについての内容です。そして、もう一冊の聖書はルツ記ですが、ユダヤ人と結婚した異邦人の女について書かれたところが興味深いです。なぜ異邦人の女だったルツ記がこれほど大切に紹介されているのでしょうか？ただ一つ、彼女はほかの神々を捨てて全能の神様のみに信仰と望みを置いて生きたからです。

<二番目、イエス・キリストの系図に載せられる>

我々が注目すべき二番目の点はルツ記の最後は系図で終わっているということです。これがさいほど読んだ本文です。今日読んだルツ記4章をみると異邦人の女ルツがボアズと結婚する過程が書かれています。13節以下にはダビデまでの系図が記録されています。18節以下をみてください

“ペレツの家系は次のとおりである。”“ペレツの子はヘツロン、ヘツロンの子はラム、ラムの子はアミナダブ、、、”

21節には“サルモンの子はボアズ、ボアズの子はオベデ、オベデの子はエッサイ、エッサイの子はダビデである。”これがルツ記の最後です。結局ルツ記はルツがダビデの曾おばあちゃんになることを確認して終わらせています。

新約の始めの聖書であるマタイの福音書1章1節以下によると、“アブラハムの子孫、ダビデの子孫、イエス・キリストの系図。”と書かれた後、アブラハムからイエス・キリストに至るまでの長い系図が書かれています。ところが5節をみると、“サルモンに、ラハブによってボアズが生まれ、ボアズに、ルツによってオベデが生まれ、オベデにエッサイが生まれ、エッサイにダビデ王が生まれた。”と書かれています。

異邦の女だったルツはダビデの先祖になって、イエス様の家系に載せられました。これはつまり、異邦の女だったルツが神様の民となり、イエス様の先祖になったことは人間の行為ではなくまったく神様の恵みである事を表してくれます。

<4. 今日のための教訓 >

ルツ記をとおしてわれわれは霊的暗黒の時代にも続く神様の救いの御業をみることができます。異邦の女だったルツは絶望の中でも神様の民となる過程が記録されています。ルツがやったことはただ一つだけでした。それは姑のナオミが信じている神様を捨てないで最後までつかんだ事です。いま置かれている状況は全然希望がありませんが、自分の民に戻らず、ナオミについて行きました。ルツはナオミについて行ったのではなく、ナオミが信じている神様について行ったのです。

士師時代は背教と偶像崇拜の時期でした。却ってイスラエルの民は異邦の神々を拝み、神様なしの人生を生きていました。なのに、異邦人の女だったルツはイスラエル人たちとは違って異邦の神々を捨ててむしろ神様に仕えたのです。ルツは自分の民の神、つまりモアブの神を捨てました。

1章16節から18節をみると、ルツは5つの条件をかけてナオミについて行くと言いました。あなたの行かれる所へ私も行き、あなたの住まれる所に私も住みます。あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です。あなたの死なれる所で私は死に、そこに葬られたいのです。もし死によっても私があなたから離れるようなことがあったら、主が幾重にも私を罰してくださるようにとお願いしながらあらゆる苦難を覚悟し主の翼の下(もと)で”生きようと決心したのです。たえず神様の民になろうとする追求、これが今日我々が学ぶべき大切な信仰の模範ではないかと思えます。

ルツが神様を追い求めた時神様はルツを導いて下さいました。ルツが姑と一緒にユダヤの地であるベツレヘムに来たときは刈り入れの時期でした。(ルツ1:22)彼らは落ち穂を拾いながらの生活になりますが、たまたまボアズの畑に導かれました。

2章3節をみてください。“ルツは出かけて行って、刈る人たちのあとについて、畑で落ち穂を拾い集めたが、それははからずもエリメレクの一族に属するボアズのうちであった”ここで(はからずも)だと訳されていますが、事実偶然というものは存在しませ

ん。すくなくとも神様の摂理と神様の導きを信じる我々において偶然は存在しません。しかし、神様の導きがあまりにも絶妙で、くすしいので人間の目を見た時偶然というしか言う言葉がなかったのです。人からは偶然というしか表現できないことが神様の導きの結果だったのです。

ルツは絶望の中でも根気よくナオミが信じる神様についていった時、神様はこの時からルツの生涯を導き、ついにルツはボアズと結婚してオベデを生み、ダビデの曾おばあちゃんになりました。神様を知らなかった異邦人が神様の民となったのは100%神様の恵みでした。ルツはただ神様を慕い求めただけです。人間的にはなんの望みのない選択でしたが、自分の民の神々を捨てて、姑のナオミが信じていた神様を信じて最後まで仕えたこと自体が神様の恵みでした。

我々のすべきことはただ主を慕い求めることだけです。

愛するCPC信仰の家族のみなさん！我々の前に希望がなさそうに見える時、いや人間的な望みがなくても主の翼の陰にさけましょう。詩篇91編1節で“いと高き方の隠れ場に住む者は、全能者の陰に宿る”と書かれています。神様のみをつかんで主の陰に身をさけましょう。これがまさにルツ記が教えてくれる模範です。

“わたしを愛する者を、わたしは愛する。わたしを熱心に探す者は、わたしを見つける。(箴言8章17節)”と言われました。

神様の導きは望みのないモアブの野原、絶望の野原を照らす草原の光でした。愛するクリスチャンプレイズチャーチのみなさんもルツのようにどんな状況であっても神様のみをみあげ、神様のみを信じ、神様のみによつて従うことにより神様の救いの恵みと御業を経験する祝福にあずかりますよう主の御名によつて祝福します。アーメン!!!